

〈対談〉小森陽一・佐藤博文

いま、自衛隊は。

憲法の視点から自衛隊について考えてきたこのシリーズも、いよいよ最終回です。これまでの2回では、イラク派兵と違憲訴訟の意味するもの、海外での活動実態、専守防衛から海外で闘う部隊へ変質する中で自衛官に対する人権侵害や国民に対する監視・情報統制などが表面化していることなど、憲法とのかい離が進む自衛隊のリアルな姿を学びました。今回は、世界レベルで見た自衛隊の「軍事力」の程度、世界的にも特異な米軍との関係、「沖縄問題」の本質、自衛隊と米軍に対する巨額の税金投入の実態など、最終回に相応しく自衛隊の全体像とお金についてお話いただきます。

■ 日時 2012年 **7月29日** (日) **14:00**~16:30 (開場 13:30)

■ 会場：**北海道大学・学術交流会館 第1会議室**

札幌市北区北8条西4丁目（北大正門をに入って左側）

■ 参加料：**1,000円**

※前売券は大丸藤井プレイガイド（南1西3）で購入できます。当日参加も可です。



小森陽一さん：東京大学大学院教授(日本近代文学)。加藤周一、井上ひさし、大江健三郎などが呼びかけた「九条の会」の事務局長を2004年6月発足時から務めている。著書に『歴史認識と小説—大江健三郎論』、『天皇の玉音放送』、『心脳コントロール社会』、『漱石論』、『泥沼はどこだ』など多数。



佐藤博文さん：北海道合同法律事務所。元防衛政務次官・箕輪登氏が提起した自衛隊イラク派兵差止訴訟では原告代理人のほか、全国弁護士連絡会議の事務局長も務めた。女性自衛官人権（セクハラ）裁判や自衛隊での徒手格闘訓練中に死亡した息子の国家賠償請求訴訟「命の雫」裁判などに関わっている。